

先生の大きな足跡

—先生の退職・帰国に際して—

奥 島 敬 一

わたしはグループ先生を「この道一筋」に生き抜かれた宣教師として尊敬している。

第1、先生はこの大阪女学院一筋に生き抜かれた。極めてお若い時にこの学院に来られて、今日まで41年7ヶ月、こんなに長く学院にその一生を献げつくされた宣教師は、学院の90年の長い歴史において、先にもなかったし、後にも絶対にないであろう。

先生ほどに英文学・英語学の学識があれば、どこの大学でも大手をひろげて、先生をお迎えしたことであろう。しかし、先生はこの学院一筋に生き抜いて下さったのである。わたしはこの事を高く評価し、先生に感謝する。

先生のご帰米によって戦前からの宣教師はなくなるそうで、グループ先生は戦前からの宣教師の最後の人と言えよう。

第2、先生は信仰一筋に生き抜かれた。

キリスト教の教えの最大のもは愛である。その愛は「敵を愛し、迫害する者のために祈る」愛である。日本政府は先生に謝罪しなければならない。日本が米国に宣戦を布告するや、当時まだ若かった先生を逮捕して、拘留所に収容した。その時お受けになった肉体的、精神的苦痛は実にわたしたちの想像を越えたものであったろう。

漸く交換船で帰国される。そして、アメリカで何をされたか。収容されてい

る在米邦人のために力をつくされたと聞く。戦火がおさまるや、先生はいちはやく、この日本に、この大阪に、この学院に帰って下さったのである。

先生がお帰り下さった頃、学院にはバラックが二つあるだけ、学院と玉造駅との間にはまばらに家があるだけ、電車は殺人的超満員、当時は米軍が進駐していたのであるが、先生は何一つ米人の特権をお用いにならず、わたしたち日本人の苦しみ——食糧難・燃料難——を共にして下さったのである。

「誰かあなたの右の頬をうつならば、ほかの頬をもむけなさい」の信仰一筋に先生は生き抜かれた。

第3、先生は教育一筋に生き抜かれた。

その高い学識と、学問に対する情熱、そしてそこから生れるきびしさ。先生から教えを受けたものはみな、それをひしひしと感じとった。わたしもそれを高く評価して、大学を開設する時に、まず先生のご意見とご協力を求めたのであった。本学が僅か数年にして世間の信用を獲得して今に至ったのは、全く先生の功績と思って感謝している。

この先生を失うのは本学としては大損失である。何とかしてもう2年でも3年でもと、お引きとめしたい気持ちが一杯であるだけに全く惜しくてならない。

わたしは生先にこれからは「健康一筋」に生きて頂きたいと望む。そして、度々この日本を、この大阪を、この学院をご訪問して下さって、わたしたちを励まして頂きたい。

1984年には学院は創立100年の式典をあげる。その時、学院は先生を主賓としてご招待申しあげる。そのことのためにも「健康一筋」に生き抜いて頂きたい。

先生の余生のご幸福を祈ってやまない。